

あを

10

2010





忘機 保多孝三著『柞廬印存』(二) より

忘機 (きをわする) 欲念を忘れて心がさつぱりする。機は、心の働き。
(角川大辞典)

長歌吟松風 曲盡河星稀
我醉君復樂 陶然共忘機

李白の詩の一節。詳しく分らなくとも情感が伝はる詩である。

『機』と云ふ私の愛読する句集がある。難しい句集名だと今でも思つてゐる。今は亡き著者和田魚理の家の前を先日偶々通つた。自筆の表札が木暗い門柱にまだ掛つてゐた。

この言葉を形にするのは難儀なことと思ふ。

あそ

十月



夏の雲

踏切にいつもカンナは立つてゐる
木の下に立つてる親みづすまし
かなぶんが踏まれてをりぬ東京都
水の中歩く音するうしろより
夏の雲いつもうごいてをりにけり

本町三 佐藤喜孝

蟻

煉獄の咎かと思ふ酷暑かな
葬礼やうつつの蟻が足を這ひ
白木槿破れ戸に添ひて咲きはじむ
束の間ともいくたび劫暑かさねしとも
大甕を叩いて金魚の名を呼べり

浦和 竹内弘子

三 伏

蟻踏まぬやうに歩いてつまづきし
三伏や病むにあらねどごろごろと
喜雨の音六根息を吹き返す
魂祭集ひし子らも帰りけり
今朝ふっとおとろへの見ゆ百日紅

田 端 田中藤穂

○

坂 下 る 藍 染 日 傘 白 絣
冷房の茶室の隅の風炉と釜
水茎の清清「金風白露秋」
暑きとき熱き茶その時至福なり
解きてゆく帯のぐるりの汗疹かな

三 光 坂 東 亜 未

苦 瓜

寄する波三つ四つ來たり海月かな
傘ひらきゆつくり閉ぢる水海月
なつかしくやすらかさあり蚊遣焚く
夕風に苦瓜の影ゆらゆらと
切り開き苦瓜のわた深く取る

富 田 長崎桂子

○

額の花影のごとくに残りをり
穂がのぞき青田の青のやはらぎぬ
ゑのこ草おもひおもひの風受くる
炎天下古紙回収の車去る
炎昼や子猫鳴きをり気がかりな

大 宮 早崎泰江

○

死してよき筈の子はなし天瓜粉
運不運金魚すくひをはじまりに
西瓜食む恍惚として忘れ顔
猛暑日々乳酸菌の白を飲む
大正生れ見掛けによらずパナマ帽

河田町 堀内 一郎

甲子園

夏の夢今走り出す高校児
汗まみれの顔々顔のチアガール
ランナーの一喜一憂夏盛り
身最肩の校歌流れる夏の空
持帰る汗と涙の土袋

中井 森山のりこ

似顔絵

私もと似顔絵を待つ日焼の子
はまなすや何処まで続く海岸線
利き足に坐り胼胝出来秋たちぬ
カツプラーメン急に食べたし浜昼顔
撓なり葡萄の葉影カフェテラス

落合 森理和

○

菜種刈遠目で囲む鳩の群
白く浮ぶモーターボート夏の朝
幼子の髪結ひあげて夏の朝
花のなき墓一つあり盂蘭盆会
朝顔の小さく咲けりこのとしは

東浦和 山莊慶子

○

抱く猫鼓動をだきしとも思ふ
考とおなじところに胼胝のできし夏
少年と一緒に見上ぐ百日紅
八月や秋津根の鐘底心に
近道のゆくて行く手にしじみ蝶

鍋屋横丁 吉弘恭子

法師蟬

猛暑床孤独は翳を持たぬなり
叫ぶかに炎天の雀唄ひ出す
鳴き止みてしばしは翔たず法師蟬
夏蝶に追ひ越されたるつまづきぬ
掌の中に蟬泣かせをり生きるべし

鹿 袋 渡邊友七

越後湯沢

久々の十階の風秋日和
新涼やLP盤の深き音
夏のリフト滑車に遊ぶ子猿ども
白瓜を分合ひて猿消えにけり
豊かなる稲田に日暮ひたひたと

清 瀬 赤座典子

冷 奴

冷奴ホークとナイフのマナーとか
冷奴二級酒愛し逝きし友
玉音を聞きし耳には補聴器が
秋の夕裳婆と言ふ字にルーペ出し
はるかより秘め事色の萩の風

曳 舟 遠藤 実

○

漢方の彫看板や雷ひかる
闇の中音なき道を紙魚走る
生薬の飴売る屋台夏祭
盆波をわけて精霊船はるか
炎天下耐へて無言の喫煙所

逗子 鎌倉喜久恵

○

切れ味かはた喉越しか缶ビール
名ばかりとなりし暦の秋立つ日
冷房の効かぬひと刻陽は天心
男には男の女に女の終戦日
消えはててのちまなうらに大文字

川崎・小田栄 木村茂登子

涙

涙ためふくハーモニカ冷し酒
駆出して転んで了ふ夜店の灯
滝などになりたくなかった条のあり
プラトニックラヴ蓮池の底の底
かなかなの止む時胸に涙あり

京橋 篠田純子

○

電柱の影に入りけり炎天下
本当の怖さは蛇の消えてより
遠くより戻りしやうな晝寢覚
天泣や川原光りて雨しだり
團子坂にスカイツリーが秋の空

千駄木 芝 尚子

○

宝仙寺前 芝宮須磨子

東閑堂行きも帰りも蟬時雨
(昔、宝仙寺の隠居場)

病葉が小鳥のやうに地を舞うて
身辺りにリモコン探す大暑かな
処暑過ぎてリモコン操作忙しくす
雷鳴にあわてふためく涼み台

烏賊火

つるちだして 定梶じょう

鬱ぐ子に沖の烏賊船ともしりそむ
黎咲く野に出て柩車急ぎけり
烏賊火更く暗き一つは暗きまま
傍らにちゃぶ台高し昼寢覚
噴水の羨望やまぬ高さと思ふ

○

所 沢 須賀敏子

浅間嶺にリュックを置けば蟻走る
石尊山あふれるばかり下野草
クーラーに感謝の日々や熱きお茶
クーラーを止めて虫の音聞きにけり
秋暑し路地に進みし救急車

(23頁より)

は其右側へ書き流して、例の通り筆を投げすてたが、丁度穂の方が先きに落ちたので、白い寢床の上へ少し許り墨の痕をつけた。余は筆を片付ける。妹君は板を障子にもたせかけられる。しばらくは病人自身も其字を見て居る様子であつたが、予は此場合其句に向つて何といふべき考へも浮ばなかつた。がもうこれでお仕舞ひであるか、紙には書く場處はないやうであるけれども、又た書かれはすまいかと少し心待ちにして硯の側を去る事が出来なかつたが、其後再び筆を持たうとしなかつた(碧梧桐)



前月作品

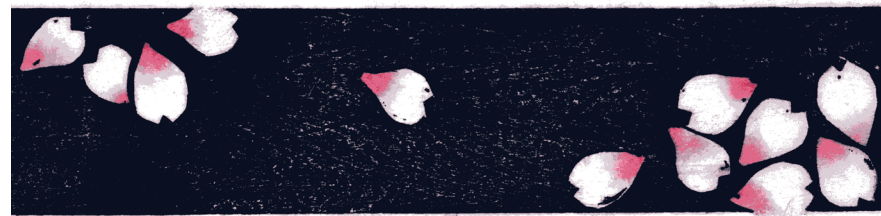
夏近しゼリーのやうな日を過ごし
 鍬洗ふ瀬に闇垂れて螢飛ぶ
 サザンの桑田聞く美容院晩夏
 人込の中に気になる夏帽子
 父の日や蠟燭立の鉄の針
 水中花生れつゝあり玻璃の中
 一夜禪終る猛暑のきざす朝
 夾竹桃三度三度をいただいて
 蠅叩柱に下げて古りにけり
 夏日中堰の水辺に虫集ふ
 雷雨過ぎたる木天蓼の葉群らかな

吉弘恭子
 渡邊友七
 赤座典子
 安部里子
 遠藤実
 鎌倉喜久恵
 木村茂登子
 篠田純子
 芝尚子
 芝宮須磨子
 定梶じよう
 喜孝抄

一人一句

ひもすがら外をみてゐる水中花
 切りつめし金柑の木に白き花
 初夏や鳶の羽のさしわたし
 杏ジャム煮てをり雨だれ弾みをり
 御柱深山の神の大樹なり
 青紫蘇を刻む厨の清しさに
 とろとろと浅き眠りに遠郭公
 線香花火むかしの闇はむらさきに
 しばらくは我も魚群に梅雨館
 思ひ出の扉の外は雲の峰
 朝顔にさざ波染まり川の町
 弓なりの瑠璃の薨や雲の峰

佐藤喜孝
 須賀敏子
 竹内弘子
 田中藤穂
 東亜未
 長崎桂子
 早崎泰江
 堀内一郎
 森山のりこ
 森理和
 山莊慶子
 吉成美代子



九月作品より

吉弘恭子

山法師雨近ければいよいよ白

佐藤 喜孝

齒応への胡瓜ぼりぼり投票日

森 理和

山法師は枝の先に小さい花が二十くらいあつまり、その回りに大きな白い花弁状の苞がつきこれが一つの花のように見える。二十くらい集った花の薄緑と花弁の白のとりあわせの美しさ。その花弁の白が更に白くなると言う。鬱陶しい梅雨になる前の白の強調、なかなかに妙である。

手早さの衰へ一日辣蕪漬け

長崎 桂子

年をとると一日一日が衰えとのたたかいになってしまふ。辣蕪漬は、漬けるまでが大変である。梅酒漬は何とか毎年のまなくとも漬けることにしている。辣蕪は、数年前にやめてしまった。いままで午前中につけあがっていたことが、丸一日掛ってしまったことの寂しさが一日というなんでもない言の葉に込められている。続けましょう次の日までかかっても。

田螺田に百体の雲水底に

渡邊 友七

齒応えがあるから胡瓜といえる。なくなってしまうたら胡瓜ではなくなる。今夏の選挙は面白かった。理和さんは政権担当政党に物足りなさを感じているのだろうか。齒応えのある胡瓜のようにパリパリと物事を改革・建設的に進めて明るい和の國になって欲しいと思つての作句かと思う。皆誰が思うことは同じである。齒応えのある政治を天職としている議員さんたちは示して欲しいと願っている。

稲を刈つたあとに田螺が田んぼを自由につかっている。十年ほど前青森の方から汽車に乗って運ばれてきた田螺をいただいた。次々と子供が生れ可愛いものだった。田螺がいる田んぼにいろいろの形の雲が生き生きとある。いっぱい田螺といろいろの雲との相乗で、百体という言葉が生きている。同じ言葉でも使

方によって駄目になってしまう。面白い句になった。

人込の中に気になる夏帽子

安部 里子

人込みの中の一人になっていると気にすることも少ないが、ぽつんぽつんと歩いていると何となく気になってしまう。夏帽子の人はつばの広いものを被っていたのだろうか。人込みの中で隣の人の顔にでもぶつかるぐらいだったのであろう。心使いも必要な時もある。それとも不似合いないろいろの物だったのか。読み手の想像力が試される作品だ。

夏負けを言ふ人にあり底力

鎌倉喜久恵

今夏は今までにない暑さでその上に長いこと、熱中症にならないように水分の補給には気をつけたつもりだ。「夏負けしちゃってね」という人は元気がある証拠。他の人に報告する力が残っている。本当の夏負けは声も出ない。精々声を出せるくらいの夏負けにとどめておきたい。面白いところに焦点が合った。涼しくなってきたので弱った身体を労りながらいければと思っている。

溝に急く白雨ににほひありにけり

篠田 純子

にわか雨と言うから急に降出したのだ。溝に急ぐわけではないがそう見えた。その雨に匂いがあると感じたようだ。如何なる匂いだったのだろうか。人によって感じ方はいろいろあるが、匂いになってみるといやな匂いではないようだ。空気中の埃やゴミを流し去った後の清しい感じが、白雨が持ってきてくれた匂いだったのだろう。雨や風空気の匂いを感じられたら俳句を作ることが楽しくなってきた証拠だ。

出水禍の夕焼みんなさびしめる

定梶じょう

異常気象の今夏はなかなか人の身体を疲れさせてしまった。いつもの夕焼は子供の頃から虹を見た時と同じようにほっとして嬉しかった。災害禍の人々にはそのような心の余裕は持ち難い。さびしめるという言葉に心が痛む。早く夕焼を見て今日の夕焼は綺麗だねと、余裕の日々が訪れることを願っている。

あをかき集

竹内弘子選



佐藤 喜孝

蛸すずしや生絹のやうな幕を張り
紫煙とは時くゆらせる生き見玉

男郎花心底のごと眉を引き

しあさつてやのあさつてと残暑なり

炎天を臓器移植の箱走る

篠田 純子

さはやかや都バス的女性運転手

八月や蟬ショワショワと昭和昭和と

炎昼行く私の顔怖しビルの玻璃

縫ひ上がる越中褌白涼し

猛暑日や間口大きな漬物屋

須賀 敏子

拝むことばかり多くて葉月なり

アメンバーのやうに蔓出すゴーヤかな

夏料理ワンプレートで済ます日々

命終の蟬ベランダにありにけり

木村茂登子

雲行のあやしくなりし簾捲く

渋滞を越えて届きし水蜜桃

燃ゆるほかなく燃えつきて陽の果てる

天高し川よりひくき街に住み
鳴かぬ犬番犬となり含羞草
それらしき竜馬の案山子二人見ゆ
手帳にははさむ紐あり鰯雲
抽出に鍵がかかりて山粧ふ
敬老日この美人画の飾り場所

遠藤 実

夏野ゆく恨みに似たる想ひあり
すぐ乾く少なき髪を洗ひけり
汗を拭く間も考へてゐる言葉
よく止るエレベーターの暑さかな
長梅雨や思ひきりよく物捨てて
截然と燈台の白夕立あと

芝 尚子

定梶じょう

電信柱犬が嗅ぎゆき雲の峰

喜雨兆す枝のででむし急ぎけり

街晩夏焙じ茶の香につきあたり

三伏や糠床に塩増やしをり

曲家に挽ぎ立てトマトもてなさる

瞳寄せまつ赤な舌をかき氷

今朝もまた蟬の片羽ちるやうに

浮足で帰る妻待つ駅つばめ

眠る嬰の何見る笑みぞ熱帯魚

しろがねの銀河へ寝落つ妻の肩

森 理和

渡邊 友七

鎌倉喜久恵

ここよりは各駅停車夏の駅
足裏の砂の火照りや揚花火

町名の変りし辻の盆踊

子等の打つ太鼓ひびけり夏祭

炎天に立ち向かふかに鶏頭花

校門の閉ざされてをり蟬時雨

きのふより細き月あり闇ひろがる

腰板にはねかえりたる二十日月

今朝秋の一刷けの雲白くあり

盆提灯しまひし部屋のうちろかな

一人居のおきどころ無き酷暑かな

リハビリに一步踏出す秋の街

コーギーのイギリス顔や秋桜

虫の声屋の疲れを癒せと言ふ

四古代目二人加はり夏座敷

田中 藤穂

吉弘 恭子

早崎 泰江

森山のりこ

赤座 典子

長崎 桂子

芝宮須磨子

選を終えて

それらしき竜馬の案山子二人見ゆ

実

幕末の志士、坂本龍馬を主人公にしたテレビドラマが人気です。稲田の広がった中に二体の「案山子」が間をおいて立っているのだと思いました。近付いて見てみたい気がしました。

蛸や生絹のやうな幕を張り

喜孝

晩夏から秋にかけて、夕方とくにカナカナと哀調のある声で鳴く。生絹（すずし）とは生糸の織物で軽く薄く「紗（ねりぎぬ）」とも云います。鳴き声の感じ、何ともいえぬ肌触りといったものでしょうか。

紫煙とは時くゆらせる生き見玉

喜孝

「紫煙」とだけで父方の祖母が髣髴とする。

大きなハンドルを回すとき、両手は殆ど輪になって、右へ左へ自在に曲るように見えますが。一通りでない緊張感だと思います。

ずっとむかし、腰の前に柔らかそうな襷目のある黒いバッグを提げて、乗客に切符を売り鉄を入れてくれる車掌さんが乗っていたもので、バスを運転するのは男性ときまっていたころです。「さはやかや」がいいです。

八月や蟬シヨワシヨワと昭和昭和と

純子

一読、かすかな既視感がありました。が敢ていただきました。仮名の部分、せわしげに鳴く声を「昭和昭和」としたのは卓抜ですが、「八月や」に季重なりの問題が残ります。

炎昼行く我が顔飾しビルの玻璃

純子

この夏は、晴れていれば「炎昼」であった。街を歩いていると、ショーウィンドーに怖い顔が

障子の内から「○○ちゃんかい？」と言うので「はい」と答えて便所へ行くのである。

かならず一人では行かないようにした。

しあさつてやのあさつてと残暑なり

喜孝

月が替ってまもないある日、秋らしい涼風が吹いて蘇生の思いでした。それも束の間、この一文を書いている今日は九月も半ばですが朝から30度という暑さです。

「しあさつて」は明明後日」で「やのあさつて」は「弥明後日」だそうです。「弥」イヤの誤で「イヤ増す」「イヤ栄」と用い「ますます」「いよいよ」の意です。

団地や建売住宅に住んでいると、日本各地の出身の人がいて「しあさつて、やのあさつて」の使い方もいろいろで面白いです。

さはやかや都バスの女性運転手

純子

映っている。連日の暑さを覚えて先を急いでいる自分の顔である。

家に居れば、クーラーをつけどおでした。

アメーバーのやうに蔓出すゴーヤかな

敏子

食べ始めのころは苦味に抵抗がありましたが、ビタミンが多いので時々食卓にのびります。

街を歩いていると、日除として一面にゴーヤの蔓を這わせている所があります。ウリ科の植物ですが「アメーバ」というとおり、原生動物のような繁殖力は驚くべきものです。

命終の蟬ベランダにありにけり

敏子

命尽きて木から落ちた蟬か。土の上でなくベランダに落ちたのだ。長い地中生活の後、卵から七年目で地表に現れ、羽化して体がかたまると鳴き出すが、僅か七日ほどで命終の日を迎える半翅類の昆虫「ベランダ」が妙。

夏野ゆく恨みに似たる想ひあり

茂登子

この夏は特に暑かったので、広い夏野を歩いたのはずつと以前のことかも知れません。

断片的にふつと蘇る「思ひ」を怨恨の恨みでなく、遺憾の憾み(残念)に替えましよう。

汗を拭く間も考へてゐる言葉

尚子

言葉・詞・辞文芸表現としての言語、詩歌、俳句がそうです。さしずめ俳句とすればちよつと苦吟している感じですね。反対に、汗をかきながら楽しんで作句にいそしんでいるのかもしれない。これしかないという珠玉のような言葉をさがしているのでしょう。

截然と燈台の白夕立あと

じょう

文字どおり「燈台」を載りとして、そこに置いたようにくつきりと見える。夕立のあとで殊に真つ白く洗いたてたように見えたというわけです。

眠る嬰の何見る笑みぞ熱帯魚

友七

ぐつすり眠っている嬰兒の頬に笑みが浮ぶことがある。楽しい夢を見ているのかと、こちらまで楽しい気がする。具合が悪ければ目を覚まして泣いたりするからです。「熱帯魚」のある位置も想像されて、静かな昼のひとつときを余すなくあらわしています。

きのふより細き月あり闇ひろがる

恭子

三日月など細い形の月でも、秋は大気が澄んでいるので、清しさは一人です。月といえば秋の月で決りということになっています。

「闇ひろがる」がやや難解です。

腰板にはねかへりたる二十日月

恭子

夏待月とも云い、臥待月よりも遅れて出る。陰暦八月二十日の夜の月。そんな遅い時間に通ったことはないが、祖母の部屋は腰板の嵌った障子を回らせた明るい六畳だった。音を消したテレビがいつもつ

いていた。

コーギーのイギリス顔や秋桜

典子

日本犬の雑種しか飼ったことがないのでよく分りませんが、洋犬のコーギーは吠えるべき時に吠える血統の正しさがあるそうです。

臆病な当方の雑種犬は、人間なら八十歳で、みまかりました。「秋桜」の取り合せが妙です。

(32頁より)

妹君は板を横へ片付けながら側に坐つて居られたが病人は何とも言はないで無言である。又た咳が出る。今度は切れたらしく反古で其痰を拭きとりながら妹君に渡す。痰はこれ迄どんなに苦痛の劇しい時でも必ず設けてある痰壺を自分で取つて吐き込む例であつたのに、けふはもう其痰壺をとる勇氣もないと見える其間四五分間たつたと思ふと、無言に前の畫板をとりよせる。予も無言で墨をつける。今度は左手を畫板に持添へる元氣もなかつたのか、妹君に持たせた儘前句「佛かな」と書いた其横へ

痰一斗糸瓜の水も

と「水も」を別行に認めた。こゝで墨をつぐ。すぐ次へ

間にあはず

と書いて、矢張投捨てるやうに筆を置いた。咳は二三度出る。如何にもせつなさうなので、予は以前に増して動氣が打つて胸がわくくして堪らぬ。又た四五分も経てから。無言で板を持たせたので、予も無言で筆を渡す。今度は板の持ちかたが少し具合がわるさうであつたが其儘少し筋違に

ををひのへちまの

と「へちまの」は行をかへて書く。予は墨をこゝでつぎながら、「を」の字の上の方が「ふ」の字のやうに、其下の方が「ら」の字の略したものゝやうに見えるので「をふらひのへちまの」とは何の事であらうと聊か怪みながら見て居るに、次を書く前に自分で「ひ」の上へ「を」と書いて、それが「ひ」の上へはいるものゝやうなしるしをしたそれで始めて「ををひの」であると合点した。其あとはずぐに「へちまの」の下へ

水の

と書いて

取らざりき

(13頁へ)

近世俳諧と漢詩文

参拾五

王 岩

僧小扇や流螢をうつおこし炭

春 澄

春澄、青木氏。承応二年（一六五三）～正徳五年（一七一五）。始めは重頼門だったが、のち宗因風に転じ、『俳諧頼政』では重頼らの貞門派を「古俳」として批判した。春澄も王建「宮詞」の承句「輕羅小扇撲流螢」を翻案した部に、下五「おこし炭」を配して句を詠んだ。

おこし炭は熾炭と書き、燃えている状態の炭のことをいう。熾し火を小さな扇で煽る仕草は流螢を撲つ宮女の面影を思わせてどことなく所在がない。漢詩に詠まれた宮女を世間の女性におき替えた翻案である。

青木春澄 作品抄

江戸桜志賀の都はあれにけり

信徳

東叡山の麓なる春

如風

孔子堂朝だつ霞鳥鳴いて

春澄

腰かけや湯水ながるる柳陰

打たり太鼓只今夕立仕る

釈迦は逃げて弥勒すすまず安国の春

歳旦を我も我もといたしけり

皆人は螢を火じやといはれけり

御忌よりも多し涅槃の檣売

後戸に飽くまで花のさかり哉

親もなし子もなし闇を行螢

強力のもみ出したる螢かな

これぞ此としの一夜の黯淡灘

アンタンダ

しら風や氷れる泪鳥羽堤

つくづく女や摩耶の跡ふむあるき産

こまいぬも非番なりけり神無月
いそが子規の声や本尊とかけめぐり
誰もかも年寄にせん今朝の春
ふくと汁さても命はある物を

あを柳集

兼題 団

佐藤喜孝 選

“団”は難しかった。訓読みがあるのだらうが定かでない漢字は発展性がない。今回は出題者のミス。投句者様のご努力に感謝します。

団子やの隣り団子や薄暑かな

どこかの観光地であらう。団子が名物と云へば柴又の草団子、岡山の吉備団子、越後の笹団子などが私でもすぐ思ひつく。軒を並べて団子屋で賑はつてゐる観光地。季語の“薄暑”の味はひが面白い。

團子汁に浮かぶ夏葱遠く来し

“團子汁”は知らなかった。“は”といふより“も”と云つた方が正しいくらい句会でも訊ねることが多い。團子汁は大分県の名物。団子と云つても団子をつぶして汁に入れるらしい。この句は夏葱が眼目。その土地に深く係はる團子汁にうかぶ夏葱に遠来の思ひを託すのである。

うしろから団扇の人のかをりくる

団扇ではなく団扇に、宵宮のイメージが浮ぶ。ゆつたりとした宵の風情が描かれてゐる。

題詠 団・團 (順不同)

一団の人遣り過す青大将

森 理和

朝顔や団子坂下指物屋

滝しぶき昔も今も団子かな

団子やの隣り団子や薄暑かな

定梶じょう

祖母がつかひ母も調法渋団扇

団欒へ出目金しつ尾ふりてけり

露団団風力発電翼休む

内灘や団結小屋に土筆生ふ

左手の衿を浮かせる団扇かな

東 亜 未

久々の一家団欒避暑地の夜

木村茂登子

泥団子磨いてみがいて夏休

緑陰のバス停名物團子汁

田中 藤穂

耶馬溪の流れ涼しく團子汁

團子汁に浮かぶ夏葱遠く来し

團欒の家族西瓜を中心に

庭の滝昔のままに團子売る

夏氷頭に甲子園応援団

長崎 桂子

エコバッグ団扇しのばせ外出す

飾りをる旅の記念の洪団扇

父母偲ぶ盆の団欒愚痴も出る

団々と雲移りゆく夏の果

竹内 弘子

一団の親子連れあり氷水

寝し子に薄い布団をかけてやる

ミステリー観て布団被りしまま昼寝

夕まぐれ団扇の先の猫の尻尾

吉弘 恭子

手をすべり蟻の穴へと団子虫

暑氣つづく團亀^{どんがめ}の血をすすめらる

団栗を踏んで滑って六地藏

掛布団二枚かさねて梅雨じめり

うしろから団扇の人のかをりくる

さはやかや我に団体交渉権

篠田 純子

玉笹の葉柄に竝ぶ露團々

佐藤 喜孝

炭團會社の干場の裏に住ひせし

布團より低きものなし夏負す

前号正誤

回天てふおそろしき武器敗戦す

田中 藤穂

書く

のびのびに便り書く日や冬たちぬ
枯野の句書くにたばさむ旅艸
気に入りのCDに変へ賀状書く
俳句とは縦に書くもの水温む
白うちはかな文字で書く千代女の句

描く

石路や山路は白く孤を描く
美男子に日向ぼこりのゴリラ描く
初紅葉ピカソの描く普通の絵

掻く

松葉掻くことに執着夏の午後
落葉掻く音も機嫌のわるさうな

欠く

みほとりをまたひとり欠く遠枯木
摩周湖の霧見し仲間一人欠く

過去

節目とて過去振り向けり郁子の花

河合 笑子

佐藤 喜孝

赤座 典子

堀内 一郎

藤野 寿子

森 理和

東 亜未

篠田 純子

定梶じょう

芝 尚子

渡邊 友七

赤座 典子

山莊 慶子

過去形の科白ぶつ草を引く

過去はモノクロ赤松に雪がふり

過去は手の届かぬところ花水木

傘

鉄柵をギイと出てゆく白日傘

有り得ぬと思ひし傘寿雛まつる

初しぐれ濡れてゆくひと傘のひと

秋時雨傘閉じ寿司屋の人となる

寒牡丹濃きも淡きも傘のうち

カクレンボ・メンコ・ケン玉・傘雨の忌

番傘に太く宿の名春の雪

うとましき人と並びぬ梅雨の傘

笠

箱庭や筏流の笠のひび

田植笠にはか農婦のあやふげに

笹百合の気品を愛でし笠ヶ岳

風の盆洩らさぬおもひ笠のうち

太子様のお笠も杖も炎天下

須賀 敏子

定梶じょう

芝 尚子

竹内 弘子

木村茂登子

吉弘 恭子

吉成美代子

鎌倉喜久恵

田中 藤穂

鈴木多枝子

森山のりこ

後藤 志づ

長崎 桂子

須賀 敏子

篠田 純子

芝宮須磨子

八月の句会

傳

中野区 カフェ傳

軽鼻の子を前から後ろから数ふ

弘子

無器用に生きて器用にビール飲む

実

諳じた勅語も忘れ敗戦忌

救急車音のつまづく熱暑かな

純子

駆出して転んで了ふ夜店の灯

かなかなの止む時胸に涙あり

滝などになりたくなかった筋のあり

穂がのぞく青田の色のやはらぎぬ

泰江

かぎりなく湧く雲白し原爆忌

美代子

道よぎる月の輪熊や山滴る

綾子

八達嶺の更にその先雲の峰

片空に雲の増えゆく凌霄花

沢山の葉に囲まれて蓮の花

やはらかに揉み合うてゐる蓮かな

頂でザツク下ろせば蟻走る

敏子

喜雨の音六根息を吹き返す

藤穂

三伏や病むにあらねどごろごろと
かなぶんの踏まれてをりぬ東京都
踏切にいつもカンナは立つてゐる

喜孝

蝉生る土のしめりの乾きつつ

敦子

群青の見る影もなし茄子を焼く

理和

考とおなじところに肝臓のできし梅雨

恭子

立ち話団扇のかげのひそみ声

喜久恵

立葵誰も観てぬ村はずれ

文子

炎天に焼かねばならぬものを焼く

寒林

調

逗子吟行

朝靄にしづかに動くシラス船

泰江

そそり立つ前山中腹水木咲く

綾子

大海へでるべくヨット向き定む

敦子

年古りし松屈強な芯の立つ

弘子

七座は会場の都合、三四郎池吟行は酷暑
のため休会にしました。

傳句会 毎月第2火曜

カフェ傳 森 理和

(03-3368-4263)

調句会 毎月第3金曜

岸町公民館 竹内弘子

(0488-86-3501)

あを吟行会

詳細は吟行案内で

七座句会 毎月第4火曜

小川苑 吉弘恭子

(090-9839-3943)

『子規言行録』より河東碧梧桐の「君が絶筆」を転載します。

十八日の朝の十時頃であつたか、どうも様子が悪いといふ知らせに、胸を躍らせながら早速駆けつけた所、丁度枕邊には陸氏令閨と妹君が居られた、予は病人の左側近くへよつて「どうかな」といふと別に返辭もなく、左手を四五度働かした許りで靜にいつもの儘仰向に寝て居る餘り騒々しくしてはわるいのであらうと、予は口をつぐんで、そこに坐りながら妹君と、醫者のこと薬のこと、今朝は痰が切れないでこまつたこと、みやもとへ痰の切れる薬をとりをやつたこと、高濱を呼びにやつたかどうかといふことなど話をして居た時に「高濱も呼びにおやりや」と病人が一言いふた。依つて予は直ぐに陸氏の電話口へ往つて、高濱に大急ぎで來いといふて歸つて見ると、妹君は病人の右側で墨を磨つて居られる。聽て例の畫板に唐紙の貼付けてあるのを妹君が取つて病人に渡されるから、何かこの場合に書けるのであらうと不審しながらも、予はいつも病人の使ひなれた軸も穂も細長い筆に十分墨を含ませて右手へ渡すと、病人は左手で板の左下側を持ち添へ、上は妹君に持たせて、いきなり中央へ

糸 瓜 咲 て

とすらく〜と書きつけた。併し「咲て」の二字はかすれて少

し書きにくさうにあつたので、こゝで墨をついで又た筆を渡すと、こんどは糸瓜咲てより少し下げて

痰 の つ ま り し

まで又た一息に書けた。字がかすれたので又た墨をつぎながら、次は何と出るかと、暗に好奇心に駆られて板面を注視して居ると、同じ位の高さに

佛 か な

と書かれたので、予は覺えず胸を刺されるやうに感じた。書き終つて投げるやうに筆を捨てながら、横を向いて咳を二三度つゞけざまにして痰が切れなので如何にも苦しさうに見えた。
(23頁へ)

二〇一〇年十月号

発行日 十月十日

発行所 東京都中野区中央2・50・3

電話 090・9828・4244

印刷・製本・レイアウト 佐藤喜孝 竹徳房

カット／恩田秋夫・松村美智子 表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

郵便振替 00130・655526(あを発行所)

乱丁・落丁お取替えます。